

受験番号					
氏名					

国語国文学科

「小論文」

【問題】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

時は延慶四年（一二二一）。この年は三月中旬から五月にかけて、いわゆる「三日病」が、九州から畿内、関東から奥州という広い範囲で流行ったという。これは俗にいう「三日麻疹」のことで、全身に赤い斑点ができるとともに、三日間くらい熱が出るという感染症である。都鄙貴賤を問わず、多くの人々がこの病で臥せったようであり、四月二十八日には元号も「応長」と改められ、全国を襲った病魔の退散が祈願された。

当時の公家洞院公賢の日記「園太暦」延慶四年三月八日の記事によれば、公賢もこの病に侵されたらしい。症状は風邪みtaiであるが、異常なほど高熱が出、食事や睡眠もままならぬほど。公賢の周辺にも、これに罹った人が多かった。しかし十日の記事には快復したとあるから、まさしく「三日病」というにふさわしいものであった。

ところで、この疫病が流行する直前に、京都市中が騒然とする、ある「事件」が起こっていた。「徒然草」第五〇段の全文を示そう。

応長のころ、伊勢国より、女の鬼になりたるをみてのぼりたりといふことありて、そのころ二十日ばかり、日ごとに、京・白川の人、鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に参りたりし」、「今日は院へ参るべし」、「ただ今はそこそこに」など言ひあへり。まさしく見たりと言ふ人もなく、虚言と言ふ人もなし。上下ただ鬼のこのみ言ひやまず。

そのころ、東山より安居院辺へ罷り侍りしに、四条よりかみさまの人、皆、北をさして走る。「一条室町に鬼あり」とのしりあへり。今出川の辺より見やれば、院の御機敷のあたり、さらに通り得べうもあらず、立ちこみたり。「鬼はやく、跡なきことにはあらざめり」とて、人を遣りて見るに、大方逢える者なし。暮るまでかく立ち騒ぎて、果ては聞諺おこりて、あさましきことどもありけり。

そのころ、おしなべて、二三日人のわづらふこと侍りしをぞ、「かの鬼の虚言はこのしるしを示すなりけり」と言ふ人も侍りし。

（現代語訳略）

伊勢から、鬼になった女を連れてきたという奇妙な噂が、京中を駆けめぐった。この噂は二十日ほど続いたらしく、昨日は西園寺殿に、今日は院の御所に、今はどこそこに、というふうに広がっていった。この、「西園寺殿」「院の御所」といった具体的な地名が鬼が来たという非日常的な事態と、日常的な世界とをつなぐ「噂」の役目をはたす。話が妙なリアリティを持つのである。

（中略）

兼好の時代は現代のように情報網が発達しておらず、正確な情報入手も難しかったので、これがデマに過ぎないという確信はだれも持てない。いわゆる知識人であった兼好ですら、「やはり、根拠のない話ではないのだから」と、一時的にしろ、この噂が真実であった可能性を捨てていない。普通の人ならばなおさらである。噂が噂を誘発し、いわゆる集団ヒステリーのような状態にまで発展してしまった。しまいに喧嘩まで起きたというが、兼好は「あさましきことども」と書いているから、それだけではなく、さまざまな暴挙が繰り広げられたのであろう。

受験番号					
氏名					

国語国文学科
「小論文」

そして興味深いのは、この鬼騒動を、三日麻疹という日本全国に広がった疫病と関連づけて考える巷説があったことである。すなわちこれは、疫病という「鬼」が、社会に侵入してくる予兆であったと捉えているのである。もちろん実際には、両者はまったく関係ないだろう。しかしこういった単純な結び付けは、現代社会でも容易に起こり得ることである。たとえば、この「鬼」が特定の人種や思想を持った人たちであつたら――。

たとえば十四世紀、ヨーロッパの人口の三分の一が亡くなったとされるペストの流行時、キリスト教に敵対するユダヤ教徒が食べものや酒に毒を入れたとする流言が広まり、大量のユダヤ人が迫害されたことなどはよく知られている。あつてはならないことだが、それが疫病の流行と結びつけられたとき、心無い差別や迫害が横行しかねないことは、容易に予想される。

それにしても、なぜ「鬼が来た」というような噂が飛び交つたのか。この問題について最も重要な指摘をしているのは、安良岡康作である。安良岡は、近代の徒然草注釈書の金字塔とも言える『徒然草全注釈』のなかで、まずは先述した洞院公賢の日記の記事を引き、延慶四年（応長元年）に流行したこの疫病の事実について紹介する。そこには、この病気が俗間では「田楽病」と呼ばれていたという記述があるのだが、安良岡はこのことに注目し、例の鬼騒動は、当時田楽が異常なまでに流行していたことと関係があるのではないかと推測した。

田楽とは、のちの能楽の一流流となつた、舞踏と音曲の芸能である。公賢は、この「田楽病」について記した日に先立つこと六日、延慶四年三月二日の日記に、西園寺家別邸の北山殿で田楽が興行されたことを記している。続けて、田楽はこの頃あちこちで流行しており、それはまるで「天魔」のしわざかと思われるほどだ、とも書いている。他の資料を見ても、当時の田楽とは、一般人が仮面や奇抜な衣装を身にまとい、群集をなして踊るようなものであつたらしく、しばしば暴徒化したりもしたようだ。

こういった、田楽に浮かれる京都市中の熱狂のなかに、「鬼が来た」という噂が紛れ込み――田楽のいであちも、この噂の生成に関与したであろう――、騒ぎがいつそう大きくなったのではないかと、安良岡は言う。さもありなんと思われる。しかし、兼好が田楽のことを描かず、そのオプシオンともいうべき鬼騒動のことだけを書いたのはなぜか。それは、こうした流言蜚語に右往左往させられる群集心理のありさまをこそ、彼が描きたかつたからに他ならない。

（川平敏文「流言蜚語と古典文学」による。）

（注）院の御棧敷…院が賀茂祭を見物するための常設の棧敷

はやく ……そもそも・やはり

願 ……下顎のこと。ここでは二つのものをつなぐものを指す。

問一 『徒然草』第五〇段の内容を説明しなさい。

問二 「流言蜚語に右往左往させられる群集倫理のありさま」について、具体的事例に触れつつあなたの考えを述べなさい。

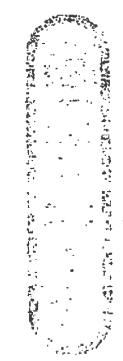
【注意】解答はすべて解答用紙に記入すること。解答は問一、問二などと問題番号を記入してから続けて書いて下さい。

受験番号	
氏名	

国語国文学科
「小論文」

採点欄

裏面使用可



↑ここから記入すること

Blank area for handwritten input.

ここから左には記入しないこと